

大学生の主体性に関する一考察

－「何事もほどほどに」生活する学生の増加に着目して－

大学院教育発達科学研究科 教育科学専攻
博士課程（前期課程）2年 金森 史枝
指導教員 蛭田 秀一

1. 研究の目的

本研究の目的は、大学生の主体性不足という社会問題に対し、大学生が実際にどのような特性を持っているかについて分析することから、高等教育において主体性形成を考える際に、いかなる点に留意すべきなのかを提示することである。とりわけ「何事もほどほどに」大学生活を送る学生が増加している点に着目し、その特性を探ることから、現代の「大学生の特性」を明らかにし、主体性形成について考察する。

（社）日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関する調査」（平成23年）など各種調査データ等で産業界から「学生の主体性の欠如」が指摘されており、さらに、大学内からも大学生の主体性のなさや自我の弱さという学生の変化から、従来とは異なる「学生の特性」を把握したうえで高等教育を考えるべきことが示唆されている（高石2009、川上2013）。また、「大学生の過ごし方」についての先行研究からは、溝上（2009）により、大学生のタイプは4分類され、従来では見られなかった「よく遊びよく学ぶ」大学生像が提示されたとともに、将来の人生（Future Life）の展望と結びつける日常生活（Daily Life）の2つのライフが大学生生活を支えることを明らかにしている。

ところで、全国大学生生活協同組合連合会では毎年学生アンケートを実施しており、その中で、大学生活の送り方を「豊かな人間関係」「勉強第一」「何事もほどほどに」「サークル第一」「趣味第一」に区分して、その内のどれに重点をおいて大学生活を送るかを尋ねている。この回答の時系列データから、大学生活の重点を「何事にもほどほどに」においている学生が、1982年の14.6%から2010年には21.5%に増加していることが、高校生新聞2012年12月号「大学生活の重点の変化」において示されている。

そこで、本研究では、主体性形成について考察するにあたり、主体的とは言えないと思われる行動を選択して

いる大学生、すなわち、「何事もほどほどに」重点を置いて過ごす学生の特性に着目するという、対極にある概念を比較材料とする理論を用いて研究対象を選択した。

先行研究において、「学生の特性の把握の重要性」が説かれているにもかかわらず、「何事もほどほどに」大学生活を送る大学生については、まだほとんど言及されておらず、既存の学問的蓄積に対する貢献への観点からもこの研究が待たれていると考えた。

以上を踏まえ、「なぜ「何事もほどほどに」大学生活を送る学生が毎年徐々に増えているのか。」という具体的な問いを設定し、何かに熱中することや頑張ることよりも、むしろ「何事もほどほどに」というものの考え方を持つ学生が増えているのは、どのような特性をもつ学生が増えているからなのかという研究仮説を立て、分析を行った。

2. 分析の概要と分析結果

第1章では、大学生活を「何事もほどほどに」過ごす学生の増加に着目し、「何事もほどほどに」大学生活を送る学生の意識や行動の分析をとおして、学生の主体性形成について検討することを目的とした。分析方法として、分析1では、2010年に京都大学高等教育研究開発推進センター及び公益財団法人電通育英会が実施した「大学生のキャリア意識調査2010」のデータを用いて、学生側の二次分析を行った。分析2では、2012年に京都大学高等教育研究開発推進センター、東京大学大学総合教育センター中原研究室及び公益財団法人電通育英会が実施した「学校から仕事へのトランジション調査2012」のデータを用いて、社会人側の二次分析を行った。分析3では、インターネットリサーチ（株式会社マクロミル）を用いて、412名の大学生を対象に、「大学生活に関するアンケート」として実施したデータを基に量的分析を行った。

以上の3つの分析から、次の結果が導出された。ま

ず、授業外の活動度の高いグループは、早い段階から将来に向けて考える傾向にあると解釈できた。また、「何事もほどほどに」大学生生活を過ごすことは、従来イメージされているような活動度が低く、何事も「適当」に過ごすというネガティブな意味のほかに、活動度が高いグループが相当数含まれていることも示唆された。次に、社会人として成果を出した人は、どのような大学生活を過ごしていたのかという点については、変化の激しいグローバル社会において、既に成果を出した社会人は、大学時代から「豊かな人間関係」を構築してきた傾向にあると推測できた。そして「何事もほどほどに」ということに重点をおいた大学生生活を送ってきた社会人は、成果を出せることにつながる傾向にあることも明らかとなった。さらに、現役大学生が「主体的」についていかに考えているかについては、「主体性の認識」そのものに齟齬があり、また、「何事もほどほどに」に過ごす理由として、「いろいろなことにのめりこまない方がうまく生きられる」と将来への適応への良策として考えている学生が多いことも明らかとなった。

第2章では、「何事にもほどほどに」大学生生活を送ることに重点を置く大学生の特性に関する自由記述回答のデータを分析し、現役大学生の特性を「質的分析」から探索することを目的とした。データは、前記「大学生活に関するアンケート」のうち、「なぜ「何事もほどほどに」大学生生活を過ごす人が増えていると思いますか。」という自由記述回答を用いた。

分析の結果、「何事もほどほどに」大学生生活を過ごす人が増えている理由を尋ねた回答から、「主体的に大学生活を送っている」に分類された学生が約15%、「ネガティブに適当に生きるのではなく社会への適応を意識した生活している」が約15%、さらに、「さまざまな選択肢を模索し多様性を受け止めている」が約15%であった。そして残りは、「現実逃避」「他者軽視」「責任転嫁」「自己防衛」の4つのカテゴリーに分類され、それは「心の弱さが見受けられる」という大カテゴリーにまとめられた。その合計は約45%となり、心の弱い若者像が浮き彫りとなった。

第3章では、前章までの結果を受けて、大学生生活の過ごし方と「何事もほどほどに」大学生生活を送ることについて、大学生に対するインタビューデータを通して考察することを目的とした。手法は大谷(2008)(2011)のSCATを用いて、「この学生なら主体的に大学生活を送っている学生」と認められる学生を体育会系クラブに所属する者の中から、クラブの担当教員に調査の趣旨を説明した上で2名の学生を紹介してもらい実施した。データ採取は、半構造化インタビューを用いて音声記録から作成した逐語録をデータとした。なお、本研究は名

古屋大学総合保健体育科学センターの研究審査委員会の承認を得て実施した。

分析の結果、まず、2名が「大学生生活の重点」にしているものとして選択したのはそれぞれ「何事もほどほどに」と「勉強第一」であった。このうち、「何事もほどほどに」を選択した理由については、大学での学問も社会勉強もどれを落とすことも優先順位をつけることもできないくらい大事であり、「何事もきちんとするから大学生生活のどれもが大事で均等配分するような意味」での「何事もほどほどに」であることが明らかとなった。さらに、2人とも大学生活の中で、積極的に「豊かな人間関係」を自分から構築しようとし、実際に行動に移していることが明らかとなった。

3. 結論と課題

本研究で得られた知見は、以下のとおりである。

まず、学生側からの分析では、「何事もほどほどに」大学生生活を過ごすことは、何事も「適当」に過ごすというネガティブな意味以上に、活動度が高く、協調性も考慮しながら、何事も「適度」にポジティブに過ごすことを含んでいることが考えられたが、社会人になって成果を出すことについては、学生時代の「何事もほどほどに」という考え方には成果にはつながらないのではないかと推測された。多重比較からは、「豊かな人間関係」を大学時代から構築してきた人が社会人になっても成果につながる適応力があることが明らかとなった。

次に、「何事もほどほどに」大学生生活を過ごす人が増えている理由を分析した結果からは、「何事もほどほどに」の表現における心の弱い若者像が浮き彫りとなり、産業界や大学内部等から、「主体性不足」が問われる背景には、この心の弱さを持った学生の数(割合)が増えていることが関係しているのではないかと推測できた。

以上から、高等教育において主体性の形成を考える際には、学生の特性が変化しており、「心の弱さ」がみられる学生が増えていると考えられる実態から、この「心の弱さ」が本当に弱いのか、またいかなる弱さなのかという点から、いっそうの探究を行うとともに、この「心の弱さ」が克服されるような、キャリアカウンセリングなど個別的な支援が求められると考える。

【参考文献】

- 大谷尚(2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案-着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」名古屋大学教育発達科学研究科紀要54 (2), pp27-44.
大谷尚 (2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization - 明

示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法』『感性工学』10 (3), pp.155-160.
川上華代(2013)「現代学生の特徴と学生相談についての一考察」『和光大学人間学部紀要』6, pp.141-153.
高石恭子 (2009)「現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援」『京都大学高等教育研究』

15, pp.79-88.
溝上慎一 (2009)「「大学生の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討－正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」、『京都大学高等教育研究』15, pp.107-118.